

もし今、ガンディーが生きていたら ―遺志の体現者が送る大震災被害の日本人へのメッセージ―

ナーラーヤン・デサーイ
栗原香織 訳

ガンディーを祖父として慕い、多感な時期に生身の指導を受けたデサーイ氏は、ガンディー思想と遺志の体現者として知られる。高齢にもかかわらず今なお精力的に後進の指導と現今社会の矛盾を衝いて、人間社会のあるべき姿を説く活動を続けている。氏のもとで学ぶ訳者が東日本大震災に見舞われた日本人に伝えるべきメッセージを求めたのに応えて、氏は長文の手紙をしたためた。ガンディー思想の実践経験を踏まえて手紙に込めた思いの根底には、被災者への暖かい愛情と労わりと同時に、現代社会が抱える矛盾に対する怒りが読み取れる。ぜひ、インドのサルボダヤ運動のリーダーの声に耳を傾けていただきたい。

香織へ

日本が地震、津波、原発事故という3つの大惨事に見舞われたというニュースを聞いて心配しています。私が君と家族の安否について話をしていたとき、君は私に非常に重い質問をしてきましたね。私は考え込んでしまいました。君はこう

尋ねました。

「今、ガンディーが生きていたら、日本の人たちにどんなメッセージをくれるでしょうか？」

君からこのような質問が出てくるのはごく自然です。なぜなら君はガンディーに深く関心を持ち、私がガンディーの膝の上で遊んで育ったと知っているのですから。けれども、この質問は極めて重く難しいです。というのは、私にはその資格があるのだろうか、そう思ってしまうこと。次にガンディーが常に進化し続ける人だったこと。この2つが理由です。ガンディー亡き後、64年の歳月が経ちました。私はガンディーの膝元で暮らし、自分なりに彼を理解した上で答えようとしています。もし彼が今も生きていたら、この間にもっと進化しているはず。その意味では、私が伝えることは64年後のガンディーの言葉としては、時代遅れのものになっているかもしれません。ですが、娘のようにかわいい君が率直に質問してくれたので、できる限り答えます。もし私

の答えに納得できないとすれば、それは私に力がないからです。決して、ガンディーのせいではありません。少しでも心にすんなり私の言葉が入るなら、君の自由な感性と世俗に染まっていない純粋な心で、この先、私が伝えることの意味を掘り下げていってください。君と同じ日本の若い世代の人たちも、私の言葉からきくと人生に役立つものを見出し、くれると期待しています。

もし今、ガンディーが生きていたら

もし今、ガンディーが生きていたら、すぐに日本人たちのもとへ行こうと思いません。彼は、自分に何ができるか、何ができないか、後先を考えずにあなた方のもとへ駆けつけ、皆と悲しみを分かち合い、あなた方の涙を自分のものとして受け止めたはずで、というのは、ガンディーはただ同情するだけでは他人の涙を拭うことはできない。むしろ分かち合っただけで悲しみは減っていくことを知っていたからです。ガンディーは日本の言葉をお話することはできません。しかし彼は目で世界中の言葉をお話する人でした。ガンディーの目を見れば、あなた方が懸命に苦難と立ち向かうその姿に感動しているのがわかるでしょう。というのは日本で起きた3つの大惨事に対して、あなた方は混乱することなく、まるで国が一人の人間になったかのようにまとまり、個人の苦し

みや悲しみをものともせず、目の前に起こった悲惨な現実を乗り越えようと闘い続けているからです。しかしまた、その目には何か深く考え込んでいる様子も見取れるはずで、彼は深く祈り、そして「食」を断って真剣に思いを巡らせたことでしょう。断食は彼にとっては祈りの一つでした。インドでは、断食という言葉は「神の傍にはべる」という意味です。ガンディーは神の足元に自分の問いを投げかけ、神の導きと自身の愛情が自分の言葉の中に表れるようにと心から望んだでしょう。そして祈りの後で、君のようなガンディーに関心を寄せる人が話を聞きたいと知ると、彼は次のように語ったと思います。

原発事故は「第二の警告」

この大惨事を前にして、「私は以前から原子力の危険性を指摘してきた」と敢えて言うのは失礼です。素直に、そして謙虚な気持ちでこの惨事を第二の警告と受け止めるべきだと私は言いたい。第一の警告は広島と長崎で受け取っています。それは日本だけでなく全人類に対するものでした。しかし世界の大国はこの警告に耳を貸さず、後の数十年間、互いに核という「死の兵器」を作り続けてきました。その過程で冷戦という何とも奇妙な状況を生み出したのです。けれども、私たちは核兵器と原子力核エネルギーは不可分の関係にある

ということを理解しませんでした。不幸にも、核兵器の犠牲になったあなた方の国日本は、原子力を利用するという道を選びました。「平和のための原子力」というもつともらしい呼び名は所詮、核保有国の無謀な企てを隠すための言い訳に過ぎなかったのです。

原子力は放射能を出すうえ、決して安く手に入るものではありません。かつまったく安全ではないことが立証されています。それにも関わらず、日本が原子力を利用するようになったのは、恐らく次の理由からでしょう。一つは、エネルギー資源が乏しかったこと。次に、政府が発展の意味を「物質的な豊かさを求めること」と定め、競うことで経済成長を目指したこと。この中で、他人を犠牲にして成り立つ発展は偽りであるということを完全に忘れてしまったのです。加えて、西洋への強い憧れから、西洋の価値観、生活様式、文化などを理想と捉えて自分たちのアイデンティティを忘れ、西洋を模倣しながら発展を競ってきました。その結果、手に負えない事態が起きているのです。その行き着いた先が「科学技術には誤りがない」という過信です。それ以前に世界の大国も同じように過信し続けて過ちを犯しました。けれども私たちは自らを完璧だと信じて疑わず、人間は過ちを犯すという当たり前のことを忘れてしまったのです。

この大惨事を機に、これまでの考えを改めようとは思いま

せんか？ 真理を求めるひとりの人間として、私はこう忠告したい。ニュースで知る限り、日本政府や電力会社は原発事故による放射能拡散の実態と影響、つまり、どれほど放射能が漏れ、今も広がっているのか、その事実を隠そうとしているように見受けられます。これは間違っています。日本人々だけでなく、世界中の人々をも欺き、一体何の役に立つのでしょうか？ 恐らく、事実を隠す者やそれに加担して利益を得る者、そして彼らと結託する政治家も少なくないでしょう。そういう人たちはしばらくの間は身を守れるでしょうが、国民を裏切っていることに違いはないのです。しかもこの事実の隠蔽は私たちの世代だけでなく、この先、何世代にも影響するということを見逃すことはできません。真実を隠そうとする人たちは、人間が放射能を長期的に浴びた場合、どんな影響があるのかを知っています。しかし、彼らは自らの利害を考慮して、あたかも何も起こってはいないかのよう

に振舞い、私たちを騙そうとしているのです。

考えるべき3つの問題

強者の力が肯定され、真理が否定されるのは社会の罪です。これに対し何をすべきか、改めて考えねばなりません。その際、問題を3つに分けることができます。まずは個人の問題。次に人と人、そして共同体の問題。最後に人間が自然とどう

向き合うかという問題です。

個人の問題としては、皆が欲望の充足を追求するのをやめるべきです。自分自身を抑制し、良心に照らし合わせて善悪の判断ができる生活のあり方を見出さねばなりません。そして満ち足りて生きるこの本当の意味を知るために、競争ではなく他者との絆を結ぶ気持ちを育くむのです。それは際限のない消費願望を捨て、「分かち合い」と「思いやり」をもって、物を手にするだけでは満たせない、心からの喜びを知ることから始まります。弱者が底辺で苦しむようなピラミッド型の仕組みでは平等な社会は成り立ちません。個は共同体のために、共同体は地域全体のために尽くしていく。その過程で連帯感の輪が生まれ、それは波紋のように個を中心として広がっていきます。将来の社会基盤はこのようにして作らなければなりません。その際、サイエンス（科学）とスピリチュアリティ（高邁な精神）の融合が不可欠です。科学的にものを捉え、スピリチュアリティを人生の道しるべとするのです。

科学的にものを捉えるとは、心からの満足とは何か、どうすれば社会で価値観の違う者同士が共存できるのか、そして人間と自然との共生について答えを探し出すことです。これには、よく自分自身を見つめ、偏見のない視点で現実を吟味してその本質を見極めるという作業が必要です。もちろん、

失敗からやり直す柔軟な考え方も忘れてはなりません。スピリチュアリティとは、人間が一番優れているという考えを捨て、人は自然の一部であり、一なるものが天地のすべてを司っていることと悟ることです。そして生きる上で結果を得るためには手段を問わないという考えではなく、真理に叶った手段こそが正しい結果を生むと信じていることです。なぜなら自分と自分の行動、そして結果というこの3つは互いに切り離せないからです。これは人生を導く道しるべとなり、科学はそれが示す方向へ進むための力となります。

現代では政治でも社会でも「力」が幅をきかせています。強者が力を振るう政治が行われ、自由競争・グローバル化という名で利益優先の市場化が進んでいます。このなかでは一般大衆が犠牲にされ、利益を得るのはわずかな人々なのです。このような社会には自由や平等はありません。そこでは他者に対する思いやりは消え失せてしまっています。その大きな理由は、権力が一極に集中しているために、人々のつながりが失われつつあるからです。持つ者も持たざる者も、搾取する者もされる者も、共に人間らしさを失っているのです。人々がしつかりとした絆で結ばれた社会を作るなら、個人の価値観と社会構造を同時に変えていかななくてはなりません。つまり生活を根底から変えるほかないのです。

社会を崩壊へ導くのは、富への行き過ぎた執着、抑制のき

かない権力、度を越えた野心などです。これに対し私欲を抑え、権力に屈せず、自分本位の考えを変えなくてはなりません。結局、個人が変わらなければ、社会は変わらないのです。ねたみ、野心、そして戦争にもつながりかねない競争をやめ、喜びと悲しみを共有し合える、分かち合いと思いやりの心にあふれた社会を作るべきです。そのためには、誰もが社会に積極的に参加できるような社会構造に変える必要があります。社会参加によって個々が社会の恩恵を受け、自身の義務も果たせます。これはお互いをよく知っているような小さな共同体でのみ実現できます。新しい社会は小さな集まりから作るのです。そのためには様々な社会をよく見て、実験を繰り返していかなくてはなりません。これは、君たち新しい世代の人たちの仕事です。私たち古い世代の人間は、社会をここまですべて発展させてきました。ここから先、社会を前に進めていくのは、君たちの役目です。

人類の歴史から、少しは実例を見つけられると思います。まず歴史を学んで社会に必要なものを探り、それを発展させていくのです。古い社会の有益なものをうまく取り入れ、新しい社会を作るといふ意味です。決して古い社会の仕組みをそのまま新しい社会に導入するということではありません。もしかすると、私の話は夢のようだと感じるかもしれませんが、ね。けれども社会変革は夢を見て初めてできるものではない

でしょうか？ 私が今述べていることは、決して実現が難しいと思つていません。というのは、私は自分の経験から何をすべきかを理解した上で伝えているからです。次に私の経験から得たことを述べます。

社会変革を実現するために

私は誰もが明確な目標を持つべきだと思います。私にとつては真理の探求、これが人生最大の目的です。あなた方も私と一緒に真理の探求者になつてもらいたい、そう願つていきます。真理を探求するなかで、人生の道しるべを見誤ることなく社会に公平性を築き、自然と共存する資質を得ることができまます。私にとって、真理とは「神」そのものです。私は「神」をこの目で見たことはありませんが、真理は「神」であると言ひ切れます。私はこのように「神」を信じ、なにこともまず自分自身から実験を始めます。このとき、すぐに成果を望むのではなく、「一歩ずつの前進で十分」、こう考えています。なぜなら、自分がしたことの結果はすぐに出るわけではないからです。成果を期待せずにひたすら努力することが最もゆるぎない事の進め方だと確信しています。同時に、奉仕と愛はゆっくりと輪になって広がっていくものと信じています。私は行動するとき、必ず真理にかなう手段を使います。たとえどんなに些細なことであっても、真理に反する手

段を認めることができせん。手段はそのまま目的に通じるからです。さらに私はどんなに小さい仕事でもきちんとやり続けるべきだと考えています。それは個人に社会での運動で得られるものとは別の大きな力を与えるからです。最後に、高い目標と一緒に小さく実現可能な目標も持っています。今の社会を根底から変えるのは、そう簡単なことではありません。それは私も十分理解しています。そもそも理想とは何でしょうか？理想とは手が届きそうで手が届かない、そういうものです。だからそれを手に入れるために努力するのです。これまで個人が何をすべきか、について述べてきました。次に社会変革に必要なと思われることをまとめます。

社会変革の要件

変革の第一歩は社会の意識を高めることです。残念ながら現代は、人間の生死に関わる危機的な問題が次から次へと起きています。これを人々に広く知らしめ、問題意識を高めることが肝心です。それには従来のマスメディアとは別に新しいメディアを使うことも考えるべきでしょう。次に人々の個々の力を組織することです。これは権力を持つということではありません。権力を握って変革するのは真の変革とは言えず、社会的な古い仕組みを強固にするだけだからです。新しい堅実な組織は、下から上へ、共同体や仲間のような小

さな集まりから作りあげるべきです。

既存社会を変えようとするとき、自らの不利益を被る者たちはごぞつて反対してくるでしょう。彼らは世界がどんな状況であれ、自身の利益確保のために抵抗するのです。これに対抗して命がけで闘いを挑む場合は、利益を得る者たちは富や権力を持ち、マスメディアをも支配しているという事実を押さえておかねばなりません。闘いは長く、難しいものとなるでしょう。一方で変革において最も大事なものは民衆の力です。これは次の条件を満たせば、長い闘いを耐えることができると思います。一つ目は、簡単には崩れない結束力を持つこと。二つ目は、必ず真理にかなう手段を用いること。三つ目は、人格のある指導者を持つこと。私は日本の人々のなかから必ずこのような指導者が生まれてくると信じています。何故なら、あなた方は高い問題意識を持ち、そして規律正しく、粘り強いからです。四つ目は、どんなに小さくとも、健全な社会を作るためのモデルを各所に作ることです。これは変革を阻もうとする者と闘うときに砦となるからです。

香織、この手紙を読んで、少しは得るところはありましたか。君の質問がバブー（ガンディー）に関するものなので、長い返事になってしまいました。本当の答えは、君のような若い世代の人たちが探さなくてはなりません。それには、尽

きない信念とたゆまぬ努力が必要になります。君の既成の枠組みにとらわれない知性と邪気のない純粹な心は、その答えを探すのにきつと役に立つと思います。

天は今、私たちに重大な試練を与えています。これはまさに何をすべきかを考える正念場です。私たち人間が生きて生けるものすべてに善をなす力を自らのなかに見出し、この困難に立ち向かえるかどうかが問われているのです。私はきつと立ち向かえると信じています。君がこれから人類の未来を担っていく人間のひとりとなることを期待しています。

2011年5月25日

ナーラーヤン・デサーイ

Narayan Desai 1924年12月24日生まれ、87歳、ガンディーアンの最長老指導者として遺志の継承とその生涯実践に努めている。幼少から青年期にいたる20余年間、多感な時期をガンディーとともに過ごし、薫陶を受けた。父はガンディーの第一秘書を勤めたマハーデーウ・デサーイ。ガンディー亡き後、その遺志を継いで特に農村教育に力を注いだ。現在、グジャラート・ヴィディヤピート大学の学長として後輩の指導に当たる傍ら、2004年からガンディーのメッセージを広く伝える語り部としての活動を、全国規模で展開している。

栗原香織 慶応大学卒。現在、グジャラート・ヴィディヤピート大

学博士課程に在籍。ガンディー思想の研究に励むとともに、デサーイ氏の講演活動にも同行して現代社会が抱える問題に対する氏の向き合い方と処方の提言を臨場体験している。東日本大震災に心痛めた氏が綴った本書簡は訳者本人に宛てられたものだが、その示唆に富む内容を広く日本の人たちに伝えたいとの思いから、本誌掲載となった。原文はグジャラティー語。